

第78回信州上肢外科研究会報告

2022年3月19日土曜日

ホテルブエナビスタ 2階 松本市

17:00~18:00

Hybrid

特別講演

「上肢外科に役立つ形成外科の知識と技術」

埼玉慈恵病院 埼玉手外科マイクロサージャリー研究所所長
福本恵三 先生

座長 信州大学整形外科 林正徳先生

上肢外科（手外科）は整形外科と形成外科の双方の知識と技術を要する分野ですが、残念ながら日本では形成外科医の割合はおよそ10%となっています。形成外科とは先天的あるいは後天的に欠損・変形した身体部分を修復・再建し、外貌と機能の回復を図る外科とされています。外貌とあるように、整容は形成外科医にとって重要な関心事ですが、これは手という人目につきやすい器官を扱う先生方にはぜひ配慮していただきたい事があります。創傷治癒は形成外科の主要なテーマですが、近年の進歩には目を見張るものがあります。適切な創傷管理法、創傷被覆材、陰圧閉鎖療法などを用いることで多くの創傷を保存的に治療することが可能となりました。さらには形成外科の得意分野である皮弁手術をその適応と選択を理解し必要な技量を持って行えば、より機能的・整容的な再建が得られます。



上記福本先生のご講演の要旨である。 福本先生が実際に手がけた症例の写真、手術ビデオ供覧はは大変わかりやすく、基本的な手技ができる手外科医であれば実践可能なものもあった。

松田先生、橋本先生、座長の林先生から質問があった。

松田

Q：術後の抗凝固療法はどうしておられますか？

A:1 週間ほどは施行いたします。

Q:PG は使用されますか？

A:PG も使用いたします。

橋本

Q:足趾移植時のドナーサイトへの工夫について。

A:どのように採取したかにもよる。人工真皮貼付して後日植皮としても良いが、2 チームで皮弁をあげられる時は SCIP flap によりドナーサイトを被覆している。

林

Q：手術の際にできる癒痕を予防するために、何か工夫をしていることはあるか？

A：皮線に直行しないなど皮切の入れ方に注意し、できるだけ atraumatic に組織を扱うことが重要。鑷子などもできるだけ繊細なものを用いるようにする。また、縫合糸はモノフィラメントでできるだけ細い糸を用いるようにしている。

Q：指の皮弁を行った際の術後のリハビリで工夫していることはあるか？

A：皮弁の種類にもよるが、基本的にはできるだけ早くリハビリを開始するようにし、少なくとも2週目からはリハビリを開始している。

加藤先生からは、謝意のメッセージが送られた。

現地会場には 8名の参加、会場は広く、感染対策が十分になされていた。 Online で少なくとも 25人、合計 33人以上の参加があり、成功裏に終わった。